

Avadānakalpalatā から avadānamālā 類へ

岡 野 潔

ネパールには多くの av-m 文献が存在しているが、それらはいつ成立したのか、この問いの解明のために、作成年がはっきりしている BAKL (1052 年) との関係 を明らかにすべきである。(なお、Divyāvadānamālā は古資料の集合体にすぎず、av-m 文献として異質なので、今回の av-m の考察からは除外したい。)

1. Avś の詩形改稿本と BAKL の関係

これまで学界に知られていなかったネパールの梵文仏教説話集 SMRAM の唯一の写本 NGMPP B101/3 を調べてみると、高島が用いた京大寫本 RAT (Goshima・Noguchi 87) の元の完全な形を伝える作品であることが判明した。京大寫本が全 26 章なのに対し、SMRAM は全 41 章であることから、新たに 15 の章を得ることができる。その新たに得られた 15 の章こそが、Avś のこれまでに見つかっている詩形改稿本の諸本に欠けていた最後の部分であることがわかった。従って、この写本の発見によって百年以上前の L. Feer の研究以来インド学者によって探し求められてきた、Avś の詩形改稿本の諸本 (AAM, KDAM, RAM, RAT) を組み合わせて完成体にする最後のパーツが発見されたことになる。SMRAM の発見により Avś の詩形改稿の作業計画の全体を見渡して論じることができるようになった。

さて SMRAM の発見の後でもなお未だ Avś の章の詩形改稿本が av-m 文献において見つからないものが全部で 16 ある。それは Avś の第 5, 18, 19, 31, 32, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 59, 75, 89, 99 章にあたる。Avś のこれらの章の詩形改稿本が今後に写本として見つかる可能性はかなり低い。これら 16 の章は何らかの理由で詩形改稿されなかったのではないかと疑われる。16 の章のうち、第 5 章 Soma が欠けていることは注意してよい。ネパールに伝わった梵本 Avś にはどの写本にもこの第 5 章 Soma が欠落している。そして Avś の詩形改稿本にこの第 5 章 Soma の対応話が無いことは、Avś の詩形改稿本たる av-m がインドではなくネパールで作られたことを示唆するものである (av-m 文献の写本には貝葉写本が無い事

実も、ネパール作を示唆する)。さてこれら 16 の詩形改稿本が欠けている章をよく見ると、特に Avś の第 4 部類 (31～40 章) のところで、まとまって連続的であることに気づく。第 4 部類以外で詩形改稿本が欠けている章については、欠けた理由は様々なものが考えられるけれども、この第 4 部類における連続的な欠落については何か明確な理由があるに違いない。その理由は何か、特に第 4 部類の諸説話には「古典的」なジャータカという共通性があるが、このことが詩形改稿本の製作者にとって、第 4 部類だけを除く理由となったのだろうか。しかしそのような理由は薄弱すぎて、納得できない。むしろ私は次の理由によるのではないかと思う。なぜ Avś 第 4 部類のところで連続的なかたちで詩形改稿本が見つからないかという、RAM, SMRAM 等を作った av-m の作者たちは BAKL を意識し、製作にあたって BAKL と話が重ならないように気をつけたからではないか。この第 4 部類に入っている 10 の説話のうち、第 33 章だけが KDAM で詩形改稿がなされており、それ以外の第 4 部類の九つの話を調べてみると、釈尊が前世で金を払わなかったために今世で金を要求されたという、内容があまり道徳的ではなく詩形改稿に価しない第 39 章を除き、それ以外の話 (第 31～32, 34～38, 40 章) はすべて BAKL に対応話・類話が存在していることが判明する。詩形改稿本を欠く Avś 第 4 部類の第 31-32, 34-40 章には、次のように BAKL に並行話が見つかる：

Avś [31] Padmaka	BAKL [99] Padmaka
Avś [32] Kavaḍa	cf. BAKL [42] Kanakavarṇa
Avś [34] Śibi	BAKL [91] Śibisubhāṣita
Avś [35] Surūpa	cf. BAKL [91] Śibisubhāṣita
Avś [36] Maitrakanyaka	BAKL [92] Maitrakanyaka
Avś [37] Śaśa	BAKL [104] Śaśaka
Avś [38] Dharmagaveśin	BAKL [53] Subhāṣitagaveśin
Avś [39] Anāthapiṇḍada	
Avś [40] Subhadra	BAKL [80] Subhadra

この表で [35] Surūpa は、BAKL [91] Śibisubhāṣita と話の内容がほぼ同じである。従って BAKL [91] は本来のシビ王の話である [34] Śibi の並行話であると同時に、[35] Surūpa にも相当している。また [32] Kavaḍa は BAKL [42] Kanakavarṇa と話がほぼ同じである。[39] Anāthapiṇḍada のみ、対応話・類話が BAKL にない (その理由は上記)。Avś の詩形改稿本の製作者たちがめざした巨大な Avś 詩形改稿計画は、Avś の大部分を詩形改稿したものの、百章すべての詩形改稿の達成を初めから意

図しておらず、BAKL と話が重なる部分については BAKL にまかせ、それに遠慮する形のものであったのではないか¹⁾。この第4部類の欠落から私は av-m 類の Avś 詩形改稿計画の背後に BAKL の存在を感じる。このことは、それらの av-m 類は BAKL よりも後に成立したことを意味する。この点をさらに確かめるために、以下において av-m 類と BAKL との間の借用関係を調べてみたい。

2. 過去の研究によって知られた av-m 類と BAKL の関係

2.1 AAM と BAKL の関係 ○ Bongard-Levin & Volkova (1963-1965) は AAM [5] Kuṇāla が BAKL [59] id. から合計 160 の詩節を借用していることを明らかにした。○ 岩本『序説』(p. 186) は AAM の [22] Śakracyavana が BAKL [78] id. と関係があることを指摘した。[私が確認すると、AAM [22] は BAKL [78] の第 2-22 詩節を借用²⁾。] ○ 岩本『序説』(p. 217) は AAM [24] Bhavaśarman と BAKL [82] Nārakapūrvika の借用関係に初めて言及した。[私が確認すると、AAM [24] は BAKL [82] から第 3-41 詩節を借用。] ○ 岩本『序説』(p. 186) は AAM [25] Madhurasvara が BAKL [84] id. と関係をもつことを指摘した。[私が確認すると、AAM [25] は BAKL [84] から第 3-13, 15, 17-23, 25-46, 49-51, 53-55, 57 詩節を借用。] ○ AAM [26] Padmaka には BAKL [87] id. と逐字的に一致する多数の詩節があることを Zinkgräf (1940) が明らかにした³⁾。Zinkgräf によれば、BAKL [87] の第 1-41 詩節が合致する。

2.2. BKA と BAKL の関係 ○ Sergei Oldenberg (1894), p. 77 は BKA [15] Yaśoda と BAKL [62] id. との関係を指摘した (このことは Tatelman (1996), p. lxvi, fn. 3 に教えられた)⁴⁾。○ BKA [26] Rāhulabhadrapitṛbodhana は BAKL [64] Sudhanakinnari の第 2-5 詩節を借用していることを Tatelman (1996), p. xviii, fn. 91 が指摘した。○ BKA [27] Yaśodharārāhulabhadra° は BAKL [83] Rāhulakarmapluti の第 13-16, 18, 20-25, 28, 32-34 詩節を借用していることを Tatelman (1996) が指摘した。○ BKA [33] Ekaśṛṅgamuṇi° は、BAKL [65] Ekaśṛṅga から、その章の初めと最期の部分を除き、合計 70 詩節借用していることを Oldenberg (1894), pp. 81-82 が指摘した (Tatelman (1996), p. xviii, fn. 91 に教えられた)。

3. 今回の私の研究の範囲

以上の諸学者の指摘は、個別研究の中で散発的になされた結果で、いわば点にとどまっている。点から線を浮かびあがらせるために、全体的に av-m 類の

BAKL との関係を調査する必要がある。私は av-m 類の写本を使い BAKL を用いたことが明らかな章がどの程度あるかを調べてみた。今回私が BAKL との借用関係を調べて成果があった作品は、AAM (NGMPP B94/7) と RAM (Filliozat 104-105) と RAT (高島校訂本) と KDAM (Filliozat 26-27) と JMAS (龍大写本) である。それらを調べた結果私は BAKL の詩節の借用を多数見つけた。以下にそれを報告する。

3.1 AAM と BAKL の関係 ○ AAM [1] Upaguptāśokarāja は BAKL [71] Śāṇavāsi から第 2-16 詩節を借用。○ AAM [2] Upagupta は BAKL [72] id. から第 7-20, 22-25, 27-36, 43-45, 47-49, 51-66, 68-72 詩節を借用。○ AAM [3] Aśokadamana は BAKL [69] Dharmarājikapraṭiṣṭha から第 6-20, 22-31 詩節を借用。○ AAM [7] Triratnabhajanānuśaṃsā は BAKL [73] Nāgadūtapreṣaṇa から第 1-21, 24-25, 27-28 詩節を借用。○ AAM [23] Puṇyasena は BAKL [81] Hetūttama から第 3-7, 9-17, 19-22, 27-28, 30 詩節を借用。

次に、高島が出版した京大写本 RAT の全章と RAM (1 章～12 章) を調べた結果は次のものである。

3.2 RAT と BAKL の関係 ○ 高島が校訂した RAT (Ms. A') [6] Dhanika (ed. Takahata, Chp. 18, pp. 227 ff.) は BAKL [90] id. から第 4-6, 11-13, 15-16, 20-21, 23-30 詩節を借用。○ RAT [7] Raivata (ed. Takahata, Chp. 19, pp. 237 ff.) は BAKL [105] id. から第 5-19, 21-22, 24, 26-27, 30-36, 38-40, 42 詩節を借用。以上、高島校訂本の RAT 中で二つの章が BAKL を主なソースとして作られたことが判明した。新発見の SMRAM (RAT の本来の姿) の写本で新たに得られた 15 の章 (高島が研究した京大写本 RAT には入っていなかった章) は、どれも Avs の詩形改稿本であり、BAKL と密接に関係する章はないようである。

3.3 RAM と BAKL の関係 ○ 高島が校訂した RAM (Ms. A) [10] Hiranyapāṇi (ed. Takahata, Chp. 10, pp. 118 ff.) においては BAKL [43] id. の第 18-19 詩節が借用されている (ed. Takahata, p. 132, 43cd, 44ab, 47cd, 48a)。高島が出版した RAM は 1 章～12 章だけであるので、RAM の 13 章から 34 章まではパリ写本 RAM を用いて調べてみた。結果として以下が判明した。○ RAM [16] Kaṇakavarṇa は BAKL [42] id. から第 1, 3-4, 6-14, 16-17, 20-23 詩節を借用。○ RAM [22] Paṇḍita は BAKL [41] id. から第 8-19, 21-39, 41-68, 70-89 詩節を借用。○ RAM [23] Hastaka の前半で BAKL [46] Śāristambha から第 1, 4-5, 7-20, 22-23, 26-29, 31-34, 36-48 詩節が借用され、後半では BAKL [48] Hastaka から第 1-96, 98-100 詩節が借用された。○ RAM [24] Sarvārthasiddhakumāra は BAKL [47] Sarvārthasiddha から第 1-14, 16-26, 29-56, 58-64 詩節

を借用。○ RAM [26] Dhārāmukhavajrapāṇi⁹ は BAKL [56] Gopālanāgadamana から第 2, 4-21, 25, 27-29 詩節を借用。○ RAM [27] Stūpa は BAKL [57] id. から第 1-12, 14-16 詩節を借用。○ RAM [28] Nāgakumāra は BAKL [60] id. から第 1-30, 32 詩節を借用。○ RAM [29] Karṣakasvastikabrāhmaṇa は BAKL [61] Karṣaka から第 1-2, 4-14 詩節を借用。○ RAM [30] Yaśorāja は BAKL [62] Yaśoda から第 1-4, 6-101, 103-105 詩節を借用。○ RAM [31] Mahākāśyapa は BAKL [63] id. から第 1-59, 61 詩節を借用。○ RAM [32] Vidura は BAKL [76] id. から第 1-8, 10, 12-14, 17-21, 23, 24 詩節を借用。○ RAM [33] Kaineeyaka は BAKL [77] id. から第 1-8, 10-18, 20, 22 詩節を借用。

3.4 K DAM と BAKL の関係 ○ K DAM [22] Kūrmajanma は BAKL [97] Kacchapa から第 2-21 詩節を借用。○ K DAM [26] Kavikumāra は BAKL [66] id. から第 2-104 詩節を借用。○ K DAM [27] Kṛtajña は BAKL [45] id. から第 2-55 詩節を借用。また K DAM [25] Śaḍdanta は BAKL [49] id. と密接な関係をもつ (cf. de Jong (1977))。

3.5 JMAS と BAKL の関係 ○ JMAS の序章第 1 章と序章第 2 章、つまり [0.1] Śāriputra-maudgalyāyanayor ṛddhivivādasūtra, [0.2] Bhagavataḥ śākyasiṃhasya daśānām pāpānām daśāvasthālakṣaṇasūtra は三つのソースを組みあわせて作られていることが判明した。三つとは BAKL [50] Daśakarmapluti と、Āryaśūrajātakamālā と、Kāthināvadāna (ed. A. Degener) である。JMAS の序章第 1 章と第 2 章の殆どすべての詩節は、JMAS の編集者がその三つの資料のどれかを借用したということで説明できる (ただし mānasa 湖を描写する 11 箇の śloka が連続する箇所だけ、そのソースが不明である)。BAKL の借用に関して詳細をいうと、JMAS [0.1] の章は BAKL [50] Daśakarmapluti の第 1, 3-16, 18-22 詩節を借用しており、JMAS [0.2] の章は BAKL [50] の第 24-141 詩節を借用している⁵⁾。

4. 結論：av-m 文献の成立年代の推測

上述の借用関係の調査をまとめてみると、av-m 類に借用されたことがわかった BAKL の章の番号は次の通りである：41, 42, 43, 45, 46, 47, 48, 50, 56, 57, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 69, 71, 72, 73, 76, 77, 78, 81, 82, 83, 84, 87, 90, 97, 105。これらの数字を一瞥すると、ある事実に気づく。40 以前の数字が見事に欠けているのである。av-m 類に BAKL の 40 章以前の借用がない。これはなぜか。現存する最古の BAKL のネパール写本は、Nepal Samvat 422 年 (西暦 1302 年) に筆写された貝葉写本たる Cambridge Add. 1306 である。その写本は Bendall (1883) ならびに de Jong

(1979) の報告によれば、第 175 葉から 389 葉の部分（つまり作品の後半部分）しかなく、第 174 葉以前が欠けている。第 175 葉は第 41 章 Paṇḍitāvadāna の第 7 偈から始まっている。すべての後代の BAKL のネパール写本は、どれもすべてこの頭の部分を欠いた写本を祖先としている。108 章のほぼ完全なテキストが伝わっていたチベットと違って、ネパールにおいては、BAKL のまとまった写本としては、BAKL の第 41 章 Paṇḍitāvadāna 以下だけの写本しか伝わっていなかった。ネパールの av-m 類における BAKL の詩節の借用が BAKL の 41 章以後の部分だけに限られているという事実は、それらの av-m 類の中にある BAKL をソースとする章がネパールで西暦 1302 年以降に作成されたことを意味する。

さて、av-m 文献群の中で BAKL の影響を受けて作られた章を「B グループ」(BAKL 系列) と呼び、また av-m 文献群の中で Avś の詩形改稿として作られた章を「A グループ」(Avś 系列) と呼び、それぞれのグループの成立年代を考察してみたい。RAM という作品は第 1 章から第 21 章までが A グループで、第 22 章以降に並んでいる合計 11 の章が B グループである。また、K DAM は第 1 章から 24 章まで大体 A グループで占められるが、後ろの方に B グループとして第 22, 26, 27 章がある（また第 25 章も BAKL と関係）。AAM においても、最初の aśoka 説話群を除き、作品の中頃から後ろだけを見れば、同じように A グループの章を前方に、B グループの章を後方に配置するという配置の仕方が見られる。このような av-m 類の配置の仕方の共通性は、本来 A は A で、B は B で、まとめて別々に同時に成立した後、av-m の作品ごとに A + B というかたちで分けられたことを意味するのか。あるいはそれぞれの作品において、A の層が出来てから、後の時代に B の層が付加されたことを、つまり成立の層が異なることを表わしているのか。

私は先に、av-m 類における Avś 第 4 部類の詩形改稿話の欠落の意味を考えると、av-m 類の Avś を詩形改稿した章（A グループ）の成立の背後には BAKL の存在があったことが感じられることを述べた。つまり A グループの成立は BAKL と無関係ではなく、A グループは先行者としての BAKL を意識しており、BAKL の完成（1052 年）より後に成立したのである。そこで次に、A グループと B グループは違った時期に成立したと見るか、同時に成立したと見るか、という問題が生じる。それを次の α と β の二つの仮説として考えてみよう。仮説 α は「B グループは 1302 年以降に作成されたが、A グループはそれより先に成立していた」という仮説。仮説 β は「A と B の両グループはほぼ同時に成立した。A と B の両グループを含む現存する K DAM, RAM, AAM などの av-m 類は 1302 年以降に作成

された」という仮説。——このうち仮説 α には実は有力な根拠がある。A グループの成立が1302年以前であることを示唆する、de Jong (1997) による重要な指摘があるのである。それは、BAKL の Add. 1306 の写本には、後から付加された葉として KDAM から詩節を借用した章（第49章 *Ṣaḍdanta*）が入っているという指摘である⁶⁾。もし1302年に Add. 1306 の写本を作った写経生が、その写本の付加部分をも自ら書いて、そこで KDAM を利用したことが事実であると証明されるならば、KDAM という作品は1302年の時点ですでに成立していたことが判明する。de Jong (1997), p. 36 は、写本本体に後から付加された葉（199*-205*）に書かれている文字が、写本本体に書かれている文字と酷似しているところから、Add. 1306 の写本の写経生 Mañjuśrībhadrasudhi が自ら KDAM を利用したのではないかと推測している。彼の推測が正しければ、KDAM の A グループの少なくとも一部はすでに1302年以前に存在したことになる、仮説 α はそこに有力な根拠を見出したことになる。すると A グループの成立は1052年（BAKL の完成年）から1302年（Add. 1306 写本の筆写年）の間であり、B グループの成立は1302年以後であると考えることができよう。

さて今回の考察で得られた最重要な結論は、AB 両グループ、そしてほとんどの (*Divyāvadānamālā* を除く) ネパールの av-m 文献は、BAKL よりも後の成立である可能性が極めて濃いということである。av-m 文献は J. S. Speyer (1906, 1909) が推測したように5～11世紀にインドで作られたものではない。av-m 文献は最初から BAKL を強く意識して成立した。av-m 文献の出発点は実は BAKL であり、その詩的完成度を羨望し模倣する文学運動として av-m の一大創作運動がカトゥマンドゥ盆地でマッラ王朝（13～18世紀）の時代の初期に起こり、その時に短期間に第一期の av-m 文献群（AAM, KDAM, RAM 等、かなり正確な梵語を特徴とする作品群）の中核部分たる A グループがまとまって集中的に統制がとれた計画的なかたちで形成され、遅れて B グループ（のかなり多くの章）がある程度計画的に集中的に形成され、その後も18世紀初め頃まで断続的に av-m の第二期の文献群（*Newārī Buddhist Sanskrit* を特徴とする）の創作が数百年続いたと私は推測する⁷⁾。BAKL と Avś がネパールの av-m 文献という文学ジャンルの父と母であったといえよう。そもそも KDAM の題名「如意樹」は BAKL の題名「如意蔓」を意識した名前であることに今更ながら気づかされる。

（本研究は平成15～17年度科研費補助金基盤研究 C2 の成果である）

略号 : av-m = avadānamālā; AAM = Aśokāvadānamālā; Avś = Avadānaśataka; BKA = Bhadrakalpāvadāna; BAKL = Bodhisattvāvadānakalpalatā; JMAS = Jātakamālāvadānasūtra; K DAM = Kalpadrumāvadānamālā; RAM = Ratnāvadānamālā; RAT = Ratnāvadānatattva; SMRAM = Subhāṣitamahāratanāvadānamālā

註

- 1) この私の「遠慮説」に不利な事例もないわけではない。av-m 文献には BAKL と話が重なるが、BAKL に遠慮せず、BAKL から偈の借用もしていない章がわずかだがある。SMRAM [23] Yaśomitra (cf. BAKL [94] Yaśomitra; Avś. [85] Yaśomitra) がそうである。しかし基本線としてはこの「遠慮説」で大体うまく説明できる。
- 2) 以下、1 詩節丸ごとの借用ではなくとも、最低 1 pāda 程でも借用したことが確実であれば、その詩節が利用され借用されたと見なして、大まかに記述する。
- 3) W. Zinkgräf (1940) : *Vom Divyāvadāna zur Avadānakalpalatā*, Heidelberg. Zinkgräf は BAKL が AAM から詩節を借用したと推測した。しかし詩節の一致を調べてみると BAKL の章の終りにある〈まとめ〉の長い韻律の詩節までが AAM にそのまま有る。これは AAM が BAKL を借用した証拠となる。〈まとめ〉の長い韻律を章の最初と最期に置くのは BAKL の様式である。
- 4) Sergei Oldenberg (1894) : *Buddhiyskiye legendy*, Saint Petersburg.; Joel Tatelman (1996) : *The Trials of Yaśodharā. A Critical Edition, [...] of Bhadrakalpāvadāna II – V*, dissertation, Wolfson College, Univ. of Oxford, Trinity.
- 5) この JMAS の序章の第 1 章を校訂した研究として、Robert Janitz が Michael Hahn の指導の元で研究し 1990 年に Marburg 大学に提出した修士論文（未公刊）があるが、その論文を残念ながら私は参照できなかった。JMAS 序章の内容を調べるにあたっては『大谷探検隊収集梵文写本』CD-Rom (2001) の中にある JMAS の写本を利用した。CD-Rom を私に送付された龍大仏教文化研究所に感謝する。
- 6) J. W. de Jong (1977) : *The Bodhisattvāvadānakalpalatā and the Śaddantāvadāna*, *Buddhist Thought and Asian Civilisation*, Emeryville, California, pp. 27-38.
- 7) このようなインド外地での聖典外説話文献の創作運動は、13～16 世紀に東南アジアで起こった「擬経ジャータカ文献」(Paññāsa-jātaka 等) の一大創作運動を想起させる。

〈キーワード〉 avadānamālā, Avadānaśataka, Bodhisattvāvadānakalpalatā

(九州大学教授 Ph.D)

64. The Sectarian Affiliation of Stories Contained in the *Xianyu jing* (賢愚經)

Satoshi HIRAOKA

The aim of this paper is to examine the sectarian affiliation of stories contained in the *Xianyu jing* (賢愚經), paying attention to the use of narratives and clichés in the extant Vinayas. If, for instance, we find the same story in both a sūtra of an unknown sect and in all the extant Vinayas, and we can confirm that the recension of the sūtra shares certain parallels in terms of the narrative and stock phrases with only one Vinaya, then the sūtra can be safely ascribed to that sect. Here I would like to show some examples which may offer sufficient evidence to support the claim that the stories contained in this sūtra are indeed to be ascribed to the Sarvāstivādins.

65. Relationship of Avadānamālās to the *Avadānakalpalatā*

Kiyoshi OKANO

When were the avadānamālās, i.e. the *Kalpadrūmāvadānamālā*, *Ratnāvadānamālā*, *Ratnāvadānatattva*, *Aśokāvadānamālā* and so on composed? For a solution to this problem I have attempted to confirm the relationship between chapters of avadānamālās and the *Avadānakalpalatā* (A.D. 1052). I have searched through avadānamālās for verses borrowed from the *Avadānakalpalatā*. A conclusion of this paper is the following. I call all chapters of the 'Bodhisattvāvadānakalpalatā-affiliation' in many avadānamālās group B, and all chapters of the 'Avadānaśataka-affiliation' in avadānamālās group A. Both groups A and B were composed in Nepal after 1052, which is to say, after the *Avadānakalpalatā*. Group B was composed doubtlessly later than 1302, in which year the oldest Nepalese ms. of *Avadānakalpalatā*, Cambridge Add. 1306, was written. The borrowing of verses from the *Avadānakalpalatā* in group B coincides with the fact that ms. Add. 1306 lacks the first 40 chapters. Group A was composed probably between 1052 and 1302. The seven extra leaves 199*-205* of ms. Add. 1306 can be a proof that the

scribe of the ms. knew the *Ṣaḍḍantāvadāna* of the *Kalpadrūmāvadānamālā* (v. de Jong (1977), p. 32).

66. The Custom of Writing Epistles in the Pāli *Jātaka*: literacy in ancient India

Yoshifumi MIZUNO

The aim of this paper is to contribute to the knowledge of the development of literacy in ancient India by researching the custom of writing epistles found in the Pāli *Jātaka*. Because this text contains many descriptions of epistles, some of which were written by townsmen and a merchant's wife, we can assume that the custom of writing epistles was more widespread than our current estimate. We can also find some indication regarding the types of materials that were used for writing epistles. Since we are aware of only two examples in canonical verses (*gāthā*) and others in later commentaries (*Jātakatthavaṇṇanā*, etc.), we cannot definitely ascertain the inception and duration of the custom of writing epistles in India. However, this research can help us acquire other information on this phase of development of literacy in ancient India.

67. On the Buddha's first words: 'pātubhavanti dhammā' (Vin.I. 2³)

Shinkan MURAKAMI

The Pāli tradition mentions two kinds of the Buddha's first words: one corresponds to Dh.153-4, the other denotes the first three verses of Vin.I (= Ud.1-3). According to the former, the Buddha, having discovered the craving which makes His own existence in transmigration, destroyed mental defilements and ignorance with which His existence is covered just like with a roof. Then He attained the extinction of the cravings. The latter occurred to Him after having considered dependent origination (*paṭicca-samuppāda*) through the night under the Bodhi-tree. Here the constituent elements of human existence (*dhammā*) become clear (open) to the Buddha. Among these el-